



平野啓一郎さん

た知識は、いつもそうした流動的なものでした。しかも、その流動性は真実かどうかということより、時の政治権力の綱引きで決定されてしまつた。

それに対して、津和野で学んだ、いわゆる古典的な知識は、政治権力と直接には結びつかない場のものでした。

権力の中核にいて、「知」というものの中に巻き込まれた彼自身にも、功罪がありました。

彼のおかげで日本語はかなり進歩しました。しかしまた、彼のおかげで日露戦争の時のよう

晩年の鷗外が願った、石見へ帰ること、石見の人として死ぬことの一つの意味を、僕はそのように考えています。

(一部抄)

北九州芸術劇場小劇場
参加者〓約一七〇人

に、困ったことにもなった。

最新の、石見の国に帰りたい、という心情は、死を迎えた鷗外が、そういった場から身を引こうとしたことの表れではないかと思うのです。

彼は、死が、あらゆる官権、権力の及ばない重大事、すべてを打ち切る重大事である、と言います。どのような権力が関わります。どのように議論しようとも、死はそれらすべてを拒む絶対的な事件である、と言っています。

知ること学ぶこと、それを周りに伝えること——それらが政治権力と結びつく世界から身を引き、かつて生まれ育った石見の国へ帰って、一人の森林太郎として死にたい。死を迎えるにあたり、そう語ったのではないか。



山崎一穎さん

文学講座
10月5日(金)〜11月3日(土)

監修の山崎一穎氏をはじめ、文学研究者による連続講座を行いました。さまざまな角度から、森鷗外の魅力をお話しいただきました。

- ◎ 山崎一穎氏 (森鷗外記念会会長・前跡見学園女子大学学長)
「鷗外に於ける小倉」
- ◎ 清水孝純氏 (九州大学名誉教授)
「鷗外、そのポリフォニー的成熟——小倉時代の言説を中心に——」
- ◎ 中野新治氏 (梅光学院大学学長)
「森鷗外 あるいは『冬の王』」
- ◎ 佐藤泰正氏 (元梅光学院大学学長)
「鷗外と漱石」一面」
- ◎ 荘魯迅氏 (シンガーソングライター・和光大学非常勤講師)
「鷗外の漢詩をよむ」

受講者〓各回約四〇人

同行解説
養父克彦氏
(北九州森鷗外記念会理事)

行程
小倉駅→森鷗外記念館・森鷗外旧宅→西周旧居→昼食→殿町散策→安野光雅美術館→乙女峠・永明寺→小倉駅

参加者〓約四〇人



森鷗外記念館にて

文学ツアー
「森鷗外のふるさと・津和野を訪ねる」
10月10日(水)

北九州森鷗外記念会の協力を得て、鷗外の生地・津和野で文学散歩を行いました。旧宅の見学をはじめ、城下町散策など、秋の津和野を満喫しました。

来館者の声

◇ 森鷗外展を観に久しぶりに小倉へ来ました。
(二十代 女性)

◇ 森鷗外のイメージが変わりました。よき父親としての一面に親近感がわきました。今度小説を読む時は、少し感じ方が違うかもしれません。
(五十代 女性)

◇ 初めて見る写真もあり、さすがに鷗外の住んだ小倉の地だと思いました。
(六十代 女性)

◇ 平野啓一郎氏の講演を聞き、鷗外の人となりを多く学べたので、企画展もとても興味深く見ることができました。
(六十代 女性)

◇ 文学だけでなくさまざまな面からの活躍を知りました。
(四十代 女性)

このほか、たくさんのご意見を頂きました。ありがとうございました。